『暗夜行路』「第二」を読む
——直面の時・発見の時——

清水康次

一　〈庇護者〉の退場

『暗夜行路』「第二」は、主人公時任謙作が、お栄と宮本に見送られて、船で港を離れる場面から始まる。「冬にしては珍らしく長閑な日」である。「第二」の第十二章において、謙作は行き詰まった生活を打開するために、「純粋に一人になりたい」と考え、「山陽道の何処か、海に面した処で、簡単な自炊生活をする」という計画を立てていた。行き先は、兄信行の勧めでとりあえず「尾の道」と決め、やはり信行の勧めで、汽車ではなく、「横浜から船で行く」ことにし、「切符を買ふ事を信行に頼んで」いた。「第二」の冒頭で謙作が乗る船は「濠洲通ひの船」である。船にはシドニーに帰る外国人も乗り合わせる。「神戸で降りる」にしては「仰々しい」旅立ちであった。

夜、謙作は、「今日新橋まで送つて呉れた人達、信行、咲子、緒方達、それから、お栄と宮本と、それから今頃丁度ペナンあたりまで行つてゐるだらう竜岡に巴里の大使館気付で端書を書いた」。竜岡の出発は「十一月十二日」であり、前月のことと考えられる。ペナンは、現在のマレーシアのマラッカ海峡にある島の地名であり、謙作の乗っている船もこの先「マニラ」までは同様の航路をたどるが、竜岡の船は既に別の航路に踏み出し、フランスに向かっている。船の中で、

遠い海の上にいる竜岡を謙作は思い浮かべる。

竜岡と別れた事は何といつても彼には淋しい事だつた。竜岡は芸術には門外漢らしい顔を何時もしてゐたが、自身の仕事、飛行機の製作、殊に其発動機の研究に就いては、そしてそれに対する野心的な計画を話す時などには彼は腹からの熱意を示し、よく亢奮した。謙作は仕事は異つてゐたが、さう云ふ竜岡を見る事で常にいい刺激を受けた。今、さういふ友を近くに失つた彼は本統に淋しい気がされたのである。

「野心的な計画」を持ち、「腹からの熱意」を示し、「常にいい刺激を」くれる友人。竜岡は、謙作の多くの友人の中でも際だった良友である。この竜岡の人物像を振り返ることから始めていきたい。

「第一」において、竜岡は冒頭の二章に登場するほか、第四章で再び謙作とともに西緑へ行き、第七章でも、謙作・緒方とともに清賓亭へ行き、また、謙作と西緑へ行く。しかし、第八章以後は、第十章に送別会のことが出て来るだけで、彼自身が登場することはない。後に、「第三」において、飛行機のこととともに竜岡のことが語られ、謙作がフランスにいる竜岡に手紙を書く場面があるが、直接登場する場面は「第二」以降にはなく、竜岡は阪口と同様に、「第一」の前半だけで消えていく人物である。前稿において述べたが、(1)「第一」の展開は大きく二分される。前半では、夢想を強く持つことで現実とうまく向き合えない謙作が描かれ、後半では、性欲の要求に囚われ、のがれられない謙作が描かれていく。第七章から第九章にかけての部分が、前半の問題と後半の問題とが重なり合う中間地帯であるといえる。竜岡は、前半部分に登場する人物である。第八章の冒頭に、「暫く上方の旅をしてゐた宮本といふ謙作よりは年下の友達が、松茸の籠を下げて訪ねて来た」という文章があり、後半部分においては、この宮本が竜岡に代わって謙作の身近にいることになる。宮本は、第十章においては「不良少年にならうかしら」といって、「自分達に共通な一つの要求を露骨な調子で指摘」する人物であり、第十一章の「播摩」の夢に登場する人物であって、後半の性欲の問題にかかわる人物として造型されていると捉えられる。(2)これと対照的に、竜岡は、謙作を吉原に連れて行くことも含めて、恋愛への夢想・仕事への夢想にかか

わる人物として造型されていると捉えられる。そして、謙作の身近にいる人物が、竜岡から宮本に交代することは、「第二」の前半から後半への移行、夢想家から放蕩者への重心の移行と符合している。

竜岡がフランスへ出発する頃から、謙作が放蕩を始めているのを見ると、竜岡との別れは、謙作の中でブレーキとなっていたものがなくなったことを意味すると読める。さらに、「常にいい刺激を」くれる竜岡が身近に居続けていれば、謙作は、「長い仕事」をするために「純粋に一人になりたい」とは思わなかったかもしれず、竜岡との別れは、謙作の中でアクセルとなっていたものがなくなったことを意味するとも読める。心の中でブレーキともなり、アクセルともなっていた人物と別れることは、重大な事件である。先にあげた「第二」の文章において、竜岡を失った謙作の「淋し」さが初めて語られるのであるが、謙作の心の動きを考えていく上で、重要な文章であると思われる。竜岡と別れた淋しさの上に立ってさらに孤独を求めるところから「第二」は始まる。「野心」や「腹からの熱意」を持った理想を語り合う友人は竜岡以外にはなく、尾の道行によって友人たちとの交流そのものも途絶える。[3] そして、「第二」においては、謙作自身、恋愛の夢想・仕事の夢想を追うことがほとんどなくなっていくのである。

さらに、竜岡には、謙作にとっての〈庇護者〉という側面も認められる。「第一」の冒頭で、竜岡は阪口とともに登場し、謙作が「不快」を阪口にぶつける前に、「阪口をやっつけ」てしまう。「竜岡はさうする事で一方阪口を懲し、他方で、二人の間を多少でも気まづくなくして日本を去りたいと思つて居る」と、謙作は考えていた。竜岡は、衝突や決定的な決裂から謙作を守る。しかし、この庇護によって、謙作は阪口という人物を直視する機会を失い、自身の「不快」を見極める機会を失うことにもなる。つまり、〈庇護者〉とは、守ることと妨げることとの功罪の両面を持つ存在であるといえる。この〈庇護者〉の性格をより強く持ち、さらに謙作をいやす力を持つ人物が信行であった。信行が竜岡以上の庇護力と治癒力を持つことは、「第一」の第二章、西緑での場面に示されている。

謙作も竜岡も何かしらぎごちない気持に捉へられて居た。竜岡はそれを払ひのけるやうに餉台(ちゃぶだい)の上の烟草盆から紙

巻へ火を移すと、勢よく立ち上つて、障子を開け、一人縁へ出て行つた。彼が、がた〱云はして其処の硝子戸を開けると、同時に雨の音、泥濘（ぬかるみ）を急ぐ足音などが聴えて来た。

ここで、竜岡は、その行動によって「ぎごちない気持」を払いのけることにすこしは成功している。しかし、彼には、謙作に「日頃の気分」を取り戻させるほどの力はない。ところが、信行にはその力がある。

彼は一刻も早く此場面から自由になりたかつた。彼は自分の普段の気分を根こそぎ何処かへ持つて行かれたやうな気がした。そしてそれを取戻さうとでもするやうに下腹に力を入れて、自身の胸や肩のあたりを見廻したりした。

彼は不図、兄の信行の事を思つた。彼は誰よりも此一人の兄に好意と親みを持つて居た。彼は此兄を一寸思つただけでも、幾らか日頃の気分を取戻せた。

信行は、謙作を庇護し、いやす人物として登場する。愛子との事をめぐる顛末において、本郷の父との関係において、信行は謙作を庇護し、常に危難や衝突から彼を守り続ける。と同時に、愛子や愛子の母の本心、また父との関係の真実から謙作を遠ざけ、現実と直面する機会を失わせてしまう。「第二」において、この信行は〈庇護者〉の位置から離れ、やがて意図してではないとしても加害者に変貌していく。と同時に、謙作は隠されていた事実と初めて向き合うことになるのである。竜岡という〈庇護者〉の退場に続いて、信行という〈庇護者〉をも失うことで、謙作は自身の現実に直面していくことになる。

竜岡にもう一度戻って整理しておきたい。竜岡は、野心と熱意を持ち、仕事の上に「いい刺激」をくれる友人であり、また、謙作の〈庇護者〉という側面を持つ人物であった。「第一」の第一章における竜岡の〈庇護者〉のモチーフは、信行によってより大きく受け継がれる。しかし、竜岡の持つ熱意や「刺激」の側面は、ついにどの人物にも受け継がれることがない。そのことは、ともに冒頭に登場する阪口の場合と相似的である。阪口とのかかわりの中で謙作が囚われる〈拘泥〉のモチーフは、登喜子とのかかわりにおいて、より大きく受け継がれるが、阪口の持つ敵対者ないしライバルの側面

は、どの人物にも受け継がれることがない。冒頭に登場する阪口と竜岡は、それぞれの人物の持つ一つの側面を他の人物に受け継がせることで、モチーフを始動させることになる。そして、二人の人物は、受け継がれなかった側面を抱いて、退場していくことになる。確認しておきたいのは、『暗夜行路』において、謙作を除くほとんどの登場人物が役割性を強く持つことである。登場人物には、一定の役割を持って謙作にかかわり、謙作を動かし、役割を終えると退場していくという傾向が強く認められる。(4)

従来いわれている以上に、志賀直哉の体験した事実と『暗夜行路』の展開との間には大きな距離があると考えられる。『暗夜行路』の前身である草稿群から定稿へのプロセスにおいても、実在の多数の人物が、実在感を希薄にしつつ、役割的な人物に変貌していく過程が認められるだろうと予想される。そして、それは、ひとえに主人公時任謙作の実在感を高めるためであっただろう。

二　孤立した点のような存在

第三章、謙作は、尾の道の「小さい棟割長屋」の一軒に独居し、「長い仕事」にとりかかる。「彼は久し振りに落ついた気分になつて」、「自分の幼時から現在までの自伝的なものを書かうと」する。

かういふ断片的な記憶が、丁度沼水の底から沼気のぷかり〱と浮んで来るやうに浮んで来た。そしてそれらは、何れも毒にも薬にもならないやうなものが多かつたが、只一つ、未だ茗荷谷に居た頃に、母と一緒に寝て居て、母のよく寝入つたのを幸ひ、床の中に深くもぐつて行つたといふ記憶があつた。(中略)

彼はさういふ幼時の記憶から段々に書いて行つたのである。

「自伝的なもの」を書こうという意図はともかく、特徴的なのは、「断片的な記憶」の意味や軽重にかかわりなく、「浮

んで来る」ものをただ書きとめていくという書き方である。意味や軽重を問わず、ただ思い出されるものを書いていくという「仕事」は、「第一」での謙作の、意味や位置づけを求めて焦っていた姿と比べると、大きな変化を感じさせる。

「第一」に描かれていた、「夢想家」としての謙作のあり方をもう一度見ておきたい。

> 日暮れ前に点(と)ぼされた軒燈の灯といふ心持だ。青い擦硝子の中に橙色にぼんやりと光つてゐる灯が幾ら焦心(あせ)つた所でどうする事も出来ない。（中略）自分には何物をも焼き尽くさうと云ふ慾望がある。これはどうすればよいか。狭い擦硝子の函の中にぼんやりと点ぼされてゐる日暮れ前の灯りには其慾望はどうすればよいか。嵐来い。そして擦硝子を打破つて呉れ。

謙作は、一方で、どこまでも超えていきたいという巨大な欲望を持っていたが、他方、まったく無力な自分を抱えてもいた。それは、理想と現実の対立というより、理想を追い求めようとする強大な自己と、それについていく力のない弱小な自己との対立であるといえる。その弱小な自己の方が彼の現状と呼ぶべきものであるのだが、彼はなお巨大な欲望を実現したいと思う。そこに、仕事の上の夢想や、「本統の愛情」の夢想が生まれていた。

> 人類の運命が地球の運命に屹度殉死するものとはかぎらない。他の動物は知らない。然し人類だけは其与へられた運命に反抗しようとしてゐる。男の仕事に対する、あく事なき本能的な欲望の奥には必ず此盲目的な意志がある。

彼は、巨大な欲望の背後に、「人類の永生を願ふ、即ち与へられた運命に反抗し、それから逃れ出ようとする、共通な大きい意志」を想定し、自分をその「意志」の体現者と考える。「人類」の意志という夢想によって、巨大な欲望は、遠い理想や目標に向かう力として意味づけられ、今の弱小な自己も、遠い到達の途上にあるものとして位置づけられる。夢想の糸が、強大な自己と弱小な自己とを結びつけて、遠い理想につなぐ。それが、「第一」における「夢想家」としての謙作のあり方であった。恋愛についての夢想も同様であり、彼は、愛子への好意や登喜子への好意が、「本統の愛情」という理想からは遠いものであることを意識しつつ、なおそれがいつか「本統の愛情」に変わることを夢想していた。その

ことで、「熱情となつて少しも燃え立たない」彼の現実は、ありのままに凝視されることなく、遠い到達への途上という位置づけの方が強調されていたのである。夢想は、自己を一つのものにまとめあげ、位置づけてくれる、と同時に、自己の現実を直視することを妨げる、功罪の両面を持つものであった。[5]
しかし、尾の道においては、その夢想の糸は切れ、謙作は、強大な自己と弱小な自己とに引き裂かれ、分裂していく。
夜中、仕事にかかつてゐる時は仕事それ自身は殆ど捗らぬままに、妙に気分だけが冴え〴〵と異状の亢奮を覚える事が却つて多くなつた。（中略）さういふ時彼は総てと差し向ひになつたやうな、自分が非常に偉大な人間になつたやうな気持になる。
　夜の生活は多くさうであつたが、昼間は丁度反対に、彼は全くみじめな気持に追ひつめられてゐた。それは肉体からも精神からも半病人だつた。物憂く、睡く、眼は充血して、全で元気がなくなつた。
「夜中」の彼は、孤高の存在に化身し、「総てと差し向ひに」立つ。一方、「昼間」の彼は、「みじめ」に無力化する。あたかも糸の切れた凧のように、巨大な欲望はあてもなく飛び、一方、弱小な自己の方は目標を見失って打ち沈む。注目しておきたいのは、この時の謙作が思い描く、孤立した自己とすべての世界とが「差し向ひに」対立する構図である。この構図が、「第二」において、繰り返し描き出される。例えば、第一章、神戸への船の上で、彼は自分をとりかこむ「闇」に直面する。
　彼は今、自分が非常に大きなものに包まれてゐる事を感じた。上も下も前も後も左も右も限りない闇だ。其中心に彼はかうして立つてゐる。（中略）自分だけが、一人自然に対し、かうして立つてゐる。総ての人々を代表して。と、さういつた誇張された気分に彼は捕へられた。それにしろ、矢張り何か大きな〳〵ものの中に自身が吸ひ込まれて行く感じに打克てなかつた。
また、第四章、多度津への船の上で、彼は似たような「空想」に浸る。

彼はそれだけの頭を出して、大地へ埋まつてゐる大きな象が、全身で立ち上つた場合を空想したりした。それから起る人間の騒ぎ、人間が其為めに滅ぼし尽されるか、人間がそれを倒すかといふ騒ぎ、（中略）彼は何時か自分が其象になつて、人間との戦争で一人亢奮した。

前の文章では、彼は、「総ての人々を代表して」、自分だけが「自然」という外界に対抗して立つ。後の文章では、彼は一人で「人類を対手取」って戦う。自分が「人類」の側にあるのか、「自然」の側にあるのか、自身の意味は見定められていない。(6) ただ、外界にとりかこまれてただ一人で立っているという意識が共通している。外界は、彼に向かって押し寄せ、攻め込む。立ち向かうにしても、攻め込まれるにしても、あるいは、吸い込まれてしまうにしても、つまり強気のときも弱気のときも、世界に対して彼は孤独である。

「人類」の意志や「本統の愛情」というような夢想の糸が切れたことで、巨大な欲望は意味づけを失い、ただ外界に対する反抗・対抗の意識と化し、弱小な自己も位置づけを失って、小さな点に収縮する。「第二」の謙作は、「第一」の夢想の糸を失って、外界の前に孤独に立たされる。

第五章、金刀比羅への旅の中で、孤独感は極点に達する。

暗い淋しい気持が廻りから締めつけて来る。彼はそれにおさへられ、身動きもならず、只凝然（ぢつ）として居るより仕方ない気持だつた。実に静かな夜だ。（中略）

彼は眠れぬままに、帰る家もなく、それを待つ人もない乞食の身の上を想ひ、それが丁度自分の身の上だと思はずにゐられなかつた。

「彼は心から自分の孤独を感じ」る。そのとき、「暗い淋しい気持」が、自分の感情でありながら、まるで自分を取り囲む外界のように、自分に攻め込んでくる。自分の中に内面として心があるのではなく、心という外界の中に、ちっぽけな点として自分がいるかのように、彼は彼の感情に攻め込まれて立ちつくす。

圧倒的な大きさの外界と、孤立した点のような自己との対立する構図が、〈庇護者〉も夢想も失った謙作が発見する、自己のあり方の実態である。後に、「第四」において、謙作は、類似した構図を意識しながらも、そこに、対立ではなく、「溶込んで行く快感」を感じることになる。しかし、「第二」の謙作にとっては、外界は、「自然」であれ、「人類」であれ、自由にならない自分の心であれ、対抗すべき敵であって、溶け込む相手ではない。「第二」の謙作は、孤独に一個の点として、世界に対抗する。先に見た「第二」の「日記」のことばを借りれば、「嵐」は既に来ており、「擦硝子」は打ち破られ、「橙色にぼんやりと光つてゐる灯」は、外界に直面している。しかし、「灯」は、「火になつて燃え立つ」ことはできず、「嵐」の前に吹き消されそうに立ちつくしていることになる。

このときに、彼はお栄を求める。

何といつても感情的に、一番近い人間はお栄だ。そのお栄が何故もつと本統に自分の生活に結びついては来ないのだらう、そして、結びついてはいけないのだらう。

孤独の極、「暗い淋しい気持」に攻め込まれながら、謙作は、「お栄に会ひたくな」り、「感情的に、一番近い」お栄が「自分の生活に結びついて」くれることを望む。そこには、愛子の場合や登喜子の場合のような「本統の愛情」の夢想はなく、恋愛の対象としてではなく、孤独からの救済者としてお栄が求められている。確かに、「気持の上では殆ど肉親の近さにゐながら」、「雇人」でいることは「変な事」だという理屈は成り立つだろう。しかし、「心にお栄を穢して居る事からすれば、実際の関係に進まない前に正式に結婚して了ふ事の方がどの位気持がいいか知れない」とか、「お栄も本統の安定が得られる」とかというような考えは、一方的で身勝手な言い分にすぎない。彼はまた、「嘲罵の的となる事、それも自分の気持をひきしめて呉れる」と考え、結婚によって「自分も落ちつける」と考えているが、まさしく、「自分の気持をひきしめ」るための刺激として、また自分が「落ちつける」という安らぎの場として、お栄との結婚生活が期待されているのである。そのとき、謙作が求めるお栄の位置は、かつて竜岡の占めていた位置に似ている。

第六章、謙作は尾の道に帰り、信行に対して、この希望を書き送る。そして、数日後、信行から届いた返書は、謙作の希望に対するお栄の拒否を伝えるとともに、謙作の出生の秘密を明らかにするものであった。

三　小さな存在と負の存在

信行は、その手紙において、謙作のためを思い、今までの〈庇護者〉の位置を捨てる。

俺は今、此手紙で何も彼もお前に書かねばならなくなつた事を非常に心苦しく思ふ。（中略）然し黙つてゐて、此後何時までもお前を苦しめる事を思ふと、一時は崖から突落すやうな事ではあるが、思ひ切つて書かねばならぬと決心した。

信行は、謙作が父のドイツ留学中に「母上と祖父上との間に出来た子供」であること、「自家（うち）の祖父上祖母上は父上に秘密で堕胎して了はうとした」が、母の実家である「芝の祖父上」が激怒したことで、堕胎されることなく生まれてきたことを明らかにする。「愛子さんとの事も、調はない原因は全く其処にあ」り、謙作の出生の秘密を知っている愛子の母が、「お前に同情してゐながら」、娘の結婚相手とすることはできなかったのだと、信行はいう。

愛子さんの事があつた時にもお前がどうしても愛子さんを貰ひたい、と云ひ張つたら、出来るだけの事をして掛合つて見て、それで若し駄目なら、其時は仕方がない、本統の事を打明けてお前に断念して貰はうと思つたのだ。所が、幸にお前が思ひきるといふので実はほつとしたのだ。

愛子との間に「本統の愛情」を夢想しつつ、「それが熱情となつて少しも燃え立たない」謙作の弱さと、〈庇護者〉としての信行の思いやりとが、共犯者のように協力し合って、彼を真相から遠ざけていた。今、彼は、初めて真相に直面する。同時に、謙作は、母という「偶像」を失う。

あの母がどうしてそんな事をしたか？　これが打撃だつた。其結果として自分が生れたのだ。其事なしに自分の存在は考へられない。それはわかつて居た。が、さう思ふ事で彼は母のした事を是認出来なかつた。偶像化されていた母のすべてが毀損されたわけではないが、信行・お栄とともに、亡き母と彼との間にもへだたりが生じることになる。

第七章、謙作は、「日頃の自分」を取り戻し、信行への返書を書く。

書き終ると、彼は完全に今は自分を取りもどしたやうに感じた。彼は立つて柱に懸けて置いた手鏡を取つて、自分の顔を見た。少し青い顔をしてゐたが、其処には日頃の自分が居た。亢奮から寧ろ生き〳〵した顔だつた。何といふ事なし彼は微笑した。そして「いよ〳〵俺は独りだ」と思つた。彼には自由ないい気持が起つた。

そこには、孤独と同時に、庇護からの完全な脱却が認められる。「第一」の謙作は、失った「日頃の気分」を取り戻すために、信行という〈庇護者〉や「仔山羊」との接触が必要だった。しかし、今は、自分の力だけでそれを取り戻そうとしている。信行やお栄や母から離れ、彼は孤立しつつ、自立しようとしている。しかし、祖父と母との間に生まれた子であるという過去は、一個の点のような自己にネガティブな色彩を与えることになる。謙作は、信行への手紙の中に、「それは僕の知つた事ではありません。僕には関係のない事がらです。責任の持ちやうのない事です」と記し、それは、「正当な考へ方」であるのだが、実際には、問題はそう簡単には片づかなかった。

謙作は、「淋しい、謙遜な澄んだ気持」で、孤独を噛みしめる。そのとき、「誰も彼も」が急に自分から遠のいていったような感じがする。

そして彼は又亡き母を憶ひ、何といつても自分には母だけだつた、といふ事を今更に想つた。幼児の様々な記憶が甦つて来た。彼は臆面もなく感傷的な気持に浸つてそれらへ振り返つた。それがせめてもの安全弁だつた。彼は此処でも屋根に乗つた時の記憶を想ひ浮べ、涙ぐんだ。然し母の床に深くもぐつて行つた時の事を憶ふと、彼は不意に何か

から突き返されたやうな気がした。其時の母の情けない気持が彼に映つたのだ。母にはそれが自身の罪を突きつけられる事だつたに違ひない。罪の子、自分は本統に罪の子なるが故に生れながらにして、さう出来てゐたのではなかつたか。

出生の真相を知ったことで、「母の床に深くもぐつて行つた時の事」は、新たな意味を帯び、棘を持つ思い出となってくる。棘の一つは、自分が「罪の子なるが故に」人一倍淫蕩な性格を持って生まれついているのではないかという想像である。自分の持つ、意志では押さえきれない性欲は、生まれつきから来ており、それは容易に罪や悪と結びつきかねないネガティブな力なのではないかと、謙作は考える。もう一つの棘は、「亡き母」にとって、自分は、「自身の罪を突きつけられる」厭うべき存在であったのではないかという想像である。自分にとって母はもっとも慕わしい存在であるのに、母にとって自分は、いまわしい存在であったのではないか。自分は、他人に喜ばれない存在として生まれついたのではないかと謙作は考える。自分の内にある淫蕩な精神と、他人にとっての自分の意味という二つの問題において、彼は自分に負の側面を認める。

先に見たように、「第二」の夢想の糸は、自分の現状と遠い理想とを結びつけるものであったが、ここにおいては、彼を、罪や悪や「呪はれた運命」と結びつける夢想の糸が生まれている。「第二」の夢想が、謙作に〈上昇〉を促したのに比べれば、ここでの夢想は、謙作に〈下降〉を強いる。向かう方向は異なっているが、これらの想像において、「夢想家」というあり方が復活していると捉えることはできる。そして、これらの想像によって、現実はありのままには直視されず、そこに誇張や過剰が介入してくることになる。

二つの負の側面のうち、前者の問題は、謙作に、性欲を罪悪視させることになる。彼は、自分が性欲に囚われることをいままで以上に警戒し、危険視するようになる。

然し自分には同時に其反対なものも恵まれてゐる。それによつて自分は其悪い芽を延ばさなければいいのだと思つた。

本統につつしまう。自分は自分のさういふ出生を知つたが為めに一層つつしめばいいのだ。少しもそれに致命的な要素は含まれて居ないのだ。

自分が、今後淫蕩な気持を自制していけば、出生の真相も自分を良い方向に向かわせるきっかけになるという、「肯定的な明るい考」を彼は持つ。しかし、放蕩へと向かいかねない彼の「肉情」は本当に自制できるのか。第九章において、謙作は尾の道を去ろうとしつつ、「帰つてからの生活」に不安を感じる。自分はまた、尾の道へ来る前の「あの眼まぐるしい、其癖、何となくうぢ〳〵した不快(いや)な生活」に戻ってしまうのではないか。

今のやうな自分にして猶且、ああいふ生活を繰返すとすれば、それは益々落ちつけない不安な気持に追ひやられる事が如何にも見えてゐた。それなら、あんな生活を再び繰返さないやうにすればいいとも思ふ。帰るとすれば勿論、其決心を堅くして帰るのである。所が、事実、其決心はどれだけ堅いか？　どれだけ続くか？　それが彼では我ながら心許なかつた。さういふ事では経験的に自分で自分が信じられなかつた。

謙作にも、自分の「決心」が信用できない。出生の真相を知ってなお放蕩に堕ちていくとすれば、「落ちつけない不安な気持」にさらに逃れがたく囚われることになってしまう。彼は、自分の中に、意志ではどうにもならない、ネガティブな力が存在することを認める。

一方、後者の問題は、やがて、自分が誰からも喜ばれない存在なのではないかという考えにつながっていく。先走ってしまうが、第十四章に、次のような文章がある。

彼は前から総ての人が自分に悪意を持つてゐる、かう感ずる事がよくあつた。然し、それは本統はひがみで何の根拠もないものだと打消してはゐたのだが、今自分の出生を知り、それを若し却つて皆が前から知つてゐたとしたら、皆は自分の背後に何時も何か醜い亡霊を見、それに顔を背向(そむ)ける気持を持つてゐたのではなからうか、さう今更に彼には想ひ起されるのであつた。

出生の秘密によって、母だけではなく、「総ての人」と自分との間に「何かしら悪意らしいもの」を向け合う関係が生じていたのではないかと、彼は考える。その関係を解消するためには、「根こそぎ、現在の四囲から脱け出る」より他に「道はない気がする」。そして、そこに、さらにネガティブな夢想が拡がっていく。

今まで呼吸してゐたとは全く別の世界、何処か大きな山の麓の百姓の仲間、（中略）其処で或る平凡な醜い、そして忠実なあばたのある女を妻として暮らす、如何に安気な事か、彼は前日の女を想つて少し美し過ぎると思つた。然しあの女が若し罪深い女で、それを心から苦んでゐるやうな女だつたら、どんなにいいか。互に惨めな人間として薄暗い中に謙遜な心持で静かに一生を送る。

罪を背負う自分が、同じように罪を背負う女とともに、世界に対して孤立し、ただ生きていく。彼は、誰からも遠ざかり、「人類」にかかわる仕事や「本統の愛情」というような理想にも背を向けて、自分の存在を消すようにして生きていくことを想像する。そのとき、彼は、自分が誰からも喜ばれない、誰のためにもならない、負の存在であると認める。出生の真相は、彼の「責任の持ちやうのない事」であったにもかかわらず、彼は、「第一」とは逆の方向性を持つ夢想によって、自分をネガティブな存在として位置づけていく。そして、このような負の存在という意識や位置づけが、栄花や蝮のお政というような人物に彼の関心を向けさせていくのである。

四　「心の張り」という理想

少し戻るが、第八章において、信行の不用意から、謙作のお栄への求婚が父に伝わり、父の激怒を招く。父は、お栄の「解雇」を命じ、謙作とお栄は、外からの力で「引き離され」そうになる。信行は、結果的に、謙作に被害を与える位置に立ってしまう。

> 俺は本統に自分の無力を歯がゆく思ふ。全く板ばさまりだ。（中略）父上は父上の思ひ通りに主張される。お前はお前の考に従つて何でもしようとする。両方それは正しく、両方に俺はよく同情出来る。が、扨て自分の立場へ帰つて、それを考へる時に、俺は本統にどうしていいか分らなくなる。

謙作のためを思ってあえて庇護せずに真相を告げたときとは異なり、父の激怒の前では、信行は、謙作を庇護する力を失っている。そして、信行の「無力」は、〈庇護者〉としての無力から、一個の人間としての無力に変わる。信行は自分の「臆病」さを語り、「父上との衝突」を回避し続けてきた彼の生き方、父の「寛大な態度」に守られている彼のあり方が顕在化してくる。信行の位置は後退し、いままでとは逆に、謙作の強さを際だたせる役割を果たすことになる。第十章において、信行は謙作に言う。

> 俺はお前が俺より恵まれた人間だといふ気がして羨しい。お前は強い。お前は何でもお前の思ふ通りにやつて行かうといふ強い自我を持つてゐる。所が俺にはそれがない。ない事もないが、それが非常に弱いのだ。

「お前にはいつも或る一つの焦点があつて、総ての針が直ぐそれを指すのが、俺は非常に羨し」い。自分には「その焦点」がなく、「煮え切らない自分がいやで堪らな」いと、信行は言う。かつての〈庇護者〉は、今は謙作を仰ぎ見て、彼の「強い自我」への羨望を語る。ただ、その強さは、逆境にあっての強さであるという説明が後続している。

> 実際彼は信行の云ふやうに強くはなかつた。反対される事がらには否応なしに、はつきりした態度を示す割りに、心持もその様に毎時（いつも）、はつきりした態度を持つてゐるのではなかつた。反対が薄らぎ、自由が来ると却つて彼は迷つた。
>
> 自分が不義の子であつたといふ事に就いても肯定的な明るい考を彼は持つたが、時が経つにつれ、心の緊張が去るにつれ、彼は時々参る事が多くなつた。

「不義の子」という事実を外から突きつけられたときには、彼は「緊張」し、「総ての針」が焦点を指すようにして、相手にあるいは状況に対抗して立つことができる。しかし、漠然とした暗い影が心に拡がるようなときには、彼はかえっ

て迷う。そんなときには、「妙に落つけなくなつ」てしまう。外界に対して孤立する彼は、外界に反発する「心の緊張」があれば、強く立つことができる。しかし、「心の緊張」をなくしてしまえば、外界に攻め込まれて、自分を見失う。この「心の緊張」を、謙作は次第に失っていくのだが、「第二」の展開は、「心の緊張」というものについて、繰り返し問うていくことになる。

第十一章、謙作の心に、栄花という女性への関心が起こる。彼女は、性にかかわっての罪や悪を背負い、ネガティブな側面を持つ人物であった。栄花は、早くから女義太夫として高座に昇り、芸も上がり、人気も出てきたとき、不意に男と駆け落ちをする。隠れ家はすぐに知れ、彼女は既に妊娠していたが、二人の仲は引き離され、「真打」になる望みも断たれる。彼女は自暴自棄に陥り、そのとき現れた一人の男に身を任せる。「腹の児は堕胎された。――さうではない、生れたてを押し殺したのだといふ噂を謙作は其頃聞いた」。謙作母子と通じるところのある過去を栄花は背負う。そして、その男に連れられて、芸者として各地をさまよい、今は「芸者の中でも最も悪辣な女」として柳橋に出ている。謙作は、ある日、信行・石本と一緒に柳橋へ行き、彼女のさまざまの悪い噂を聞いた。

信行は其日の事をお栄に話した。信行の話し方はそれ程の経歴を持つた、そしてそれ程に悪辣な女だといふ所を幾らか強調した話し振りなので、傍で謙作は余りいい気がしなかつた。すると、今度はお栄が如何にも、いまはしさうな顔つきをしながら、「ひどい女もあるものね」と云つた。

謙作は急に腹が立つて来た。彼は「悪いのは栄花ではない」かういつてやりたい気がむら〱とした。(中略)「あの小娘がどうして、ひどい女だらう……」彼は変に苛々して来た。そして不図其時、「あゝこれは書く事が出来る」と思つた。

謙作が、自分を他人から喜ばれない存在として捉えかけているとき、同様に、誰からも喜ばれない人物である栄花に出会う。罪や悪を背負う栄花を、人々はうわべだけの理解で「悪辣な女」と決めつけ、噂だけで「ひどい女」と非難する。

謙作の中に、周囲の攻撃にさらされ、孤独に立っている「いた〳〵しい」栄花の像が生まれる。その像は、彼自身にも、また彼の母にも通うところを持つのである。世間を敵にして孤立している栄花の姿に、彼は共感を抱く。自分と同じような負の側面を持つ存在として栄花に関心を持った彼は、罪や悪を背負い、外界に対して孤独に立つ彼女の「心の緊張」に眼を向けることになる。

第十二章、謙作は、「絶望的な栄花」への共感を再確認する。逆に、「絶望的な境地」から救われて「懺悔し悔改めた栄花」を想像してみたときには、「妙に空ろな栄花」しか考えられない。「本統に一人の人が救はれるといふ事は容易な事ではない」。彼は、「絶望的な栄花」に対比させて、昔見たことのある、悔い改めた「蝮のお政」を思い出す。

彼はお政のした悪い事をしらなかつたし、それに何の同情も持てなかつたが、それでもさういふ悪事を働きつつあつた時の心の状態に比し、今が、よりいい状態だとは云へない気がして、変に淋しい不快な気持になつた。それは何れもいい状態でないに違ひない。然しお政自身の心として何方がより幸福な状態であるかを想像すると、悪事を働きつつあつた頃の生々した張りのある心の上の一種の幸福は今は全く彼女から消え去つたに違ひないと思はないわけに行かなかつた。

「悪事を働きつつあつた頃」のお政の方が、心に「生々した張り」を持っていた点で「一種の幸福」であったと、彼は捉え、悔い改めた生活は、「偽善」を重ねるだけの「心の不幸」な生活であると、彼は捉える。彼の感覚という計測器によって、たとえ善悪という世間の基準に反していようと、「悔改め」を求める「基督」教の考え方に反していようと、なお心に「生々した張り」のあることの方が望ましいと、彼は思う。

彼は現在の栄花を考へ、気の毒なそして息苦しいやうな感じを持ちながら、然し所謂悔改めをしてお政のやうな女になる事を考へると一層それは暗い絶望的な不快な気持がされるのであつた。

栄花の心の状態には同情できるが、お政の心の状態はいとわしいと、謙作は思う。彼の感覚は、栄花とお政の間に、決

定的に好悪の別を認め、明らかな優劣の差をつけてしまう。罪や悪や絶望があろうとも、息苦しいほどに緊張し、張りのある心を持っていることの方が、救いや善を手にしていても、緊張を失った「心の不幸」の中にいるよりは「幸福」であるというのが、謙作の考えである。それは、彼が、負の側面を持つ人物を見つめながら発見する、あるいは確認する、彼固有の価値観である。彼は、張りのある心というものに、何ものにも代えがたい価値を見出したのである。

しかし、栄花の「罪を罪のままに押し通してゐる女の心の張り」に「同感」する眼で振り返ったとき、彼は自身の現状のみじめさを痛感することになる。この見出された価値観において自身を顧みることで、自分の心の現状がまさしく最低のものであることに、彼は気づかされる。栄花に共感し、蝮のお政や花井お梅からは「惨めな、不快な感じ」を受けるとすれば、謙作自身、「罪の子」として、出生の真相から眼をそらすことなく、それを抱え続けて生きて行かなくてはならないことになる。しかし、実際の彼は、「自分がさういふ風にして生れた人間だといふ事を余り大きく考へまい」としていた。「それは僕の知つた事では」なく、「責任の持ちやうのない事」であると考えようとしていた。「罪を罪のままに押し通して」生きる「心の張り」に、彼は無二の価値を認める。しかし、実際の彼自身は、「罪の子」という意識を背負い続けることを望まず、「心の張り」を持ち続けることもできなかった。

> 彼は何といふ事なし気持の上からも、肉体の上からも弱つて来た。心が妙に淋しくなつて行つた。彼が尾の道で自分の出生に就いて信行から手紙を貰つた、其時の驚き、そして参り方は可成りに烈しかつたが、それだけにそれをはね退けよう、起き上らうとする心の緊張は一層強く感じられた。然し其緊張の去つた今になつて、丁度朽ち腐れた土台の木に地面の湿気が自然に浸み込んで行くやうに、変な淋しさが今ジメ〳〵と彼の心へ浸み込んで来るのをどうする事も出来なかつた。

謙作は、「人類」につながる仕事という、かつての夢想を取り戻そうとする。しかし、その夢想は今の謙作には力を与えない。「今のやうな気持で、内の力を外へ働きかける、書くといふやうな仕事のうまく行く筈はなかつた」。彼の仕事も

「心の緊張」なくしては成り立たず、彼はどうしても、張りのある心を取り戻さなければならなかった。
　彼はまた、禅宗において僧侶が悟りを開くときの心境に、張りのある心を見出し、いろいろな禅の話を信行から聞くことを喜んだ。
　総てが、現在の謙作には理想的な心の境地であつた。「何々、こつ然大悟す」其処へ来ると彼はよく泣きさうになつた。

緊張した、弾けるような心のあり方が、謙作には理想と感じられる。そして、そう感じれば感じるほど、振り返ったとき、「心が只無闇と貧しくなつた」自分のみじめさを、彼は痛感することになる。
　第十四章、そのような理想と現実との対極的なへだたりを意識しながら、謙作は、どうすることもできずに、放蕩に堕ちていく。

　彼は然し、女のふつくらとした重味のある乳房を柔かく握つて見て、云ひやうのない快感を感じた。（中略）それを何と云ひ現はしていいか分からなかつた。
　「豊年だ！　豊年だ！」と云つた。
　さう云ひながら、彼は幾度となくそれを揺振（ゆすぶ）つた。何か知れなかつた。が、兎に角それは彼の空虚を満たして呉れる、何かしら唯一の貴重な物、その象徴として彼には感ぜられるのであつた。

「心の張り」を失い、自分の心の「貧し」さをみじめに見つめていた彼が、目の前にある「女のふつくらとした重味のある乳房」に、自分の心にはない、張りや豊かさや柔軟さを見出したと読むことができる。彼が「重味のある乳房」に感じる「快感」は、単に性的なものにとどまるのではなく、「彼の空虚を満たして呉れる」ような、充実し、弾けるような「心の張り」の「象徴」に出会った「快感」でもあったと考えておきたい。

＊　＊　＊

「第二」において、謙作は〈庇護者〉から離れ、夢想からも遠ざかって、外界に対して孤独に立つ。謙作の心は激しく揺れ動き、思いがけない発見と未知の状況へ直面が続く。また、彼は、自分の中にある負の側面に見入りながら、「人類」の意志や「本統の愛情」というような、位置づけや観念を理想とするのではなく、己自身の「心の張り」を理想として求め始める。到達を願い、位置づけを焦る性急さに代わって、彼は、見えなかったものを直視し始め、自分の現状や自分の心に向き合い始めていたといえるだろう。

そして、そのような謙作の眼の前に、心というものが複雑な姿を現してきている。たとえば、第七章に、次のような文章がある。

変な淋しさ、そして、暗い何か知れぬものが四方から被ひかぶさつて来る。そして今はそれを跳返すだけの力は、身中（みうち）の何処にも潜んでゐなかつた。頭も胸も全で空虚だつた。さういふものは浸み込み放題だつた。彼は浪に捲き込まれた者が浪に身を任かせ、その過ぎ去るのを待つやうな心持で、今は素直にされるままになつてゐた。

そのとき、「淋しさ」や「暗い」ものが、外から押しよせてくるように、彼は感じる。心が、自分のものではないように、自分に攻め込み、自分を押し流す。

また、第十章では、自分の思いも寄らない感情が、突然、湧き起こるのを感じる。

彼はそれ程に祖父を嫌つてゐた。それ故、今もお栄の言葉に、堪らず、腹立たしい気持にもなつたが、同時に全く思ひがけない反対な気持が不意に湧き起つて来た事を感じた。何と云つていいか、よく分らなかつた。が、兎に角、それは矢張り肉親の愛情だつた。それは嫌つてゐながら、父親としての或る懐かしさだつた。（中略）これは彼ではあり得べからざる事だつた。それが不意に心へ入つて来た。彼は心の混乱を感じた。

覆いかぶさってくるものも、不意に湧き起こってくるものも、外から来るもののように見えて、彼の内から来るものである。心という複雑な世界、カオスのような存在が、謙作の眼に映ってきている。従って、自分が、孤立した点のような

存在ではあり得ず、負の存在というような枠に収まった存在でもあり得ないことを、彼は既に発見しつつあったといえるのではないだろうか。

注

（1）清水康次「『暗夜行路』「第二」を読む――「結論」への疑い・「答へる事」の限界――」（『光華女子大学研究紀要』第三十八集、二〇〇〇年十二月）

（2）山口幸祐「《暗夜行路・前編第二》の世界――謙作と阪口（または、冒頭と末尾）――」（『日本文学』第四十一巻第九号、一九九二年九月）に、既に指摘がある。

（3）尾の道での謙作を描く部分には、友人たちの消息は記されず、信行が友人たちの位置にすわってしまう。そのことは、第三章の次の文章から確認できる。

　彼は東京を出てから故意にお栄には余り便りをしなかつた。（中略）が、信行の方には割りに便りをした。然しそれにも彼は「これは東京ならば友達と雑談してゐる時間にその心持で書くのです」といふやうに云訳けを書いた。

（4）本多秋五氏は、「『暗夜行路』論」（『文学』第四十四巻第十一号、一九七六年十一月）において、信行の役割性を指摘し、謙作を除くほとんどの登場人物が、「みな一面的に、また断片的にしか描かれていない人物で、第一それらの人物の出し入れが大変恣意的である」と述べている。その視点で、個々の人物の意味や役割をさらに明確にする必要があるだろう。下岡友加「志賀直哉「暗夜行路」論――登場人物にみる作品構造の一端――」（『広島女子大国文』第十二号、一九九五年九月）は、その意味において有益な試みであると思われる。

（5）宮越勉氏は、「時任謙作の人間像をめぐる考察――『暗夜行路』の展開に即して――」（明治大学文学部紀要『文

芸研究』第八十六号、二〇〇一年八月）において、「時任謙作の人間像の最大のポイントは、彼が夢想家であるということである」と述べ、作品全編を通じて、謙作の持つ夢想家の側面を探っている。しかし、私は、むしろ、夢想家というあり方の本質をおさえつつ、それが変化していくことに注目していきたい。

（6）第四章・第五章での謙作は、自然に対して、また人工に対して、時には調和を感じ、時には違和を感じて、ゆれ動いている。

島々の峯の線が如何にも力強く美しく眺められた。（中略）彼は市（まち）の瓢箪屋で見た割れ瓢の割れ目の線を想ひ出した。自然の作る線、これには矢張り共通な力強さ、美しさがある事に感服した。（第四章）

それから日頃嫌ひな狩野探幽の雪景色を描いた墨絵の屏風もいいと思つた。それ程にさういふものに餓ゑてゐたやうにも彼は感じた。本社へ行くまでの道にも人工の美を見出した。（中略）尾の道で松ばかり見てゐた眼に色々変つた山の大きい木が物珍らしかつた。が、その内、不図その木の肌を気味悪く思ひ出すと、彼の弱つた神経は、それから甚く劫かされた。（第五章）

なお、『暗夜行路』の本文の引用は、『志賀直哉全集』第四巻（岩波書店、一九九九年三月）収録の本文に従った。